

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 米澤 孝子

論文題目 ファニー・ヘンゼルの「日曜音楽会」の考察

—19世紀前半のベルリンの音楽環境に照らし合わせて—

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	西川 智之
委 員	名古屋大学教授	藤井 たぎる
委 員	名古屋大学教授	宮原 勇
委 員	名古屋大学准教授	古田 香織

本論文の概要

本論文はファニー・ヘンゼルが約 15 年にわたって自宅で開催した「日曜音楽会」を、プログラムや出演者・聴衆などの観点から分析し、「日曜音楽会」が音楽史上どのように位置づけられるのかを解明しようとしたものである。

ドイツ啓蒙主義の思想家モーゼス・メンデルスゾーンの孫であり、またロマン主義の作曲家フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディの 4 歳年長の姉であったファニー・ヘンゼルは、生涯に約 500 曲の作品を創作するとともに、1831 年以降、1847 年に 41 歳で急逝するまでの約 15 年にわたって、自宅のコンサートホールを会場として「日曜音楽会」を開催した。このファニー・ヘンゼルの「日曜音楽会」は、ヨーロッパのサロン文化やベルリンのサロンについての研究のなかで 19 世紀の代表的な音楽サロンの一つとして度々取り上げられてきたが、フェリックス・メンデルスゾーン没後 150 周年を期に、ここ 20 年ほどの間に、長らく個人蔵だったファニー・ヘンゼルに関する多くの一次資料が公開されるなど研究が進み、その結果この「日曜音楽会」のかなり具体的な姿が明らかになってきた。

本論文では、ファニー・ヘンゼルの「日曜音楽会」は、社交を目的とした「サロン」というよりは、音楽を聴衆に提供する公開コンサートの形態に近いものであり、ファニー・ヘンゼルは「サロン」を主宰するサロンニエールというよりは、コンサートを企画運営するプロデューサーでありアンサンブルを統括する音楽監督ととらえられるのではないかということ、最近公開の進んだファニー・ヘンゼルの日記、手紙、フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディをはじめとする家族や友人知人の手紙、さらには当時の著名人の回想録や自伝、そして音楽新聞、音楽雑誌の記事や批評などの一次資料を駆使しながら論じたものである。

本論文は序章も含め 6 章から構成されている。

まず序章では、ファニー・ヘンゼルそしてファニー・ヘンゼルの「日曜音楽会」の従来のとらえ方について簡単に触れた後で、論文のねらいについて述べるとともに、主に使用した資料や文献について言及している。

第一章「メンデルスゾーン一族」では、ファニー・ヘンゼルの「日曜音楽会」の基盤となるドイツ市民階級の上層社会に、ユダヤ人であるメンデルスゾーン家が、当時の社会のユダヤ人に対する様々な規制の中で如何にして入り込んでいったか、そしてそのステータスの中で第三世代であるファニー・ヘンゼルがどのように成長し「日曜音楽会」という彼女の音楽活動を行うに至ったかをまとめている。その際、社会のマイノリティであるこの一族がマジョリティの世界で生きていくために武器とした教養、それを得るためメンデルスゾーン家で男女を問わず子供たちに行われた教育、同化・改宗の問題、そしてこの一家で開催されてきた「集い」や「サロン」など代々この一族の人々に受け継がれた「社交の才能」などに着目し、さらには、父アブラハム・メンデルスゾーン・バルトルディの娘に対する性別役割に基づく活動の制限についても触れている。

第二章「ベルリンのサロン」では、18 世紀末にベルリン市民階級に始まったサロン

文化の誕生と発展に関わった多くのユダヤ人女性たちを紹介し、ベルリンサロン文化と父方の祖父モーゼス・メンデルスゾーンとの関係、そしてメンデルスゾーン家と母方のイツィツヒ家のサロン活動の伝統とファニー・ヘンゼルのかかわりを探っている。

第三章「ファニー・ヘンゼルの『日曜音楽会』」は、この論文の中心を成す章である。「プログラム」の節では、一般の公開コンサートではできるだけ多くの観客を集めるために「ごちゃ混ぜプログラム」になっていたのに対し、収益の心配なくファニー・ヘンゼル自身がプログラムの構成を行っていた「日曜音楽会」では、プログラムに彼女の芸術観が表れていると断じている。また、「出演者」の節では、歌手や演奏者たちが「日曜音楽会」に無報酬で協力していたのは、このコンサートから得られる感動と充実感が大きかったからであろうと述べるとともに、その顔ぶれからも「日曜音楽会」のレベルの高さが証明されると結論づけている。続く「聴衆」の節では、「日曜音楽会」では公開コンサートよりも半世紀も早く、聴衆に「聴く」ことに専心することが求められていたという点に着目し、それは「日曜音楽会」が、娯楽や社交を目的としたものではなく、優れた芸術作品を鑑賞する場であったからだとしている。第3章の最後の節ではコンサート会場が取り上げられている。19世紀に入り、ベルリンではいくつかの大規模なコンサートホールが造られたが、室内楽に適した、しかも音楽愛好家が純粋に音楽を鑑賞できるようなホールはなかった。「日曜音楽会」の行われたメンデルスゾーン家のガーデンホールは、こうした小規模なコンサートを開催するにはうってつけの会場であった。このガーデンホールが存在していたことは、ファニー・ヘンゼルの「日曜音楽会」が成功した大きな要因であったと考察されている。

第四章「『日曜音楽会』以外のファニー・ヘンゼルの音楽活動」では、「日曜音楽会」以外のファニー・ヘンゼルの音楽活動である公のコンサートでの3回の演奏と作品の出版について、これらの実践が彼女に与えた影響と、父親から息子へと引継がれた、この一家の父権主義について論じている。

終章では、それまでの考察を振り返りながら、15年にもわたって開かれた「日曜音楽会」の持続と成功の要因を探るとともに、プログラムや聴衆マナーなどの点で当時の公開コンサートよりも優れた先駆的なものであったと結論づけている。

本論文の評価

ファニー・ヘンゼルの作曲した作品の中には、すでに研究者による分析が行われているものもあり、また「日曜音楽会」については、サロン研究の中で言及されることが多いが、本研究の独創性は、ファニー・ヘンゼルらの日記や手紙、当時の音楽新聞・音楽雑誌の記事などを使いながら「日曜音楽会」のコンサートととしての具体的な姿を明らかにするとともに、プログラムや出演者などの分析からその演奏された音楽の芸術性の高さについて考察し、その音楽史上の意義を明らかにした点にある。18世紀以降、大衆文化が形成されていく過程でのサロンの研究、あるいは19世紀に進展する音楽の多様性・コンサートという制度の成立過程などについての研究は数多くあるが、本論文は、従来音楽サロンとしてとらえられてきたファニー・ヘンゼルの「日曜音楽会」に、演奏されたプログラムや演奏者、あるいは会場などの音楽的側面からの考察

を加えながら、それが社交を目的とした「サロン」というよりは、優れた音楽を聴衆に提供する「コンサート」だったと結論づけており、ファニー・ヘンゼル研究の新たな側面を開くものであると同時に、サロン研究と音楽史をつなぐ研究としても注目される。

審査の中では、一部の用語の使い方がふさわしくないのではないか、あるいはサロン文化のとらえ方が一面的すぎるのではないかとの指摘があり、「日曜音楽会」という一種の「親密圏」の中で音楽という大衆文化が批判的に形成されていく過程が見逃されているとの疑問も呈された。また、他の女性音楽家との比較があればさらに論文の説得力が増したのではないかとの声もあったが、こうした疑問点も論文全体の評価を損なうものではなく、今後の研究を期待する声のほうが大きかった。

本論文は、一読しただけでは意味が確定しづらい手紙や日記などの資料も含め、大量の一次資料を読み込みながら丹念に論を組み立てており、その研究の姿勢は大いに評価すべきものがある。また、市民文化が形成されていく中で急速に発展していった有料の公開コンサートと、無料ではあるが限られた招待客しか聴くことができなかった「日曜音楽会」との比較を、いくつかの論点を挙げながら具体的に行っていくその方法は、非常に説得力がある。

以上により、審査委員会は全員一致で、本論文が課程博士（学術）を授与されるに値するものであると判断した。